三重大学人文学部30周年記念事業・三重大学伊賀連携フィールド開設1周年企画

「忍者」からみた日本と中国－交流の歴史と未来

報告集・資料集

セッション1　忍者の原像と変容-日本・中国との影響関係
　崔世廣　　「忍者」を通してみた中日文化交流
　片倉望　　『孫子』と『万川集海』とを比較して
　川上仁一　中国の間諜と日本の忍者
セッション2　「忍者」像の形成と現代文化
　関立丹　　忍法文学と中国
　秦　剛　　中国語圏の娯楽・メディアの中の忍者
　唐永亮　　現代中国における「忍者」文化の伝播と受容
　吉丸雄哉　近代日本における忍者像の形成
セッション3
　「私の国のNinjaとアニメ」一覧（当日配布）

　ポスター
　趣意書

2013年9月6日・7日

三重大学伊賀連携フィールド・三重大学人文学部

ごあいさつ

三重大学人文学部・学部長
樹神　成

三重大学人文学部30周年記念事業・三重大学伊賀連携フィールド開設1周年企画「『忍者』からみた日本と中国 - 交流の歴史と未来」の報告者と参加者の皆さま、そして協力していただいたすべての皆さまに主催者を代表して、お礼申し上げます。

19世紀には、江戸の大衆文化であった浮世絵がヨーロッパの絵画に大きな影響を与えました。21世紀には、戦後日本で大衆文学や漫画・アニメで取り上げられてきた「忍者（NINJA）」が世界で広く知られるようになっています。

「忍者（NINJA）」の何が人々を捉えるのでしょうか。浮世絵が、日本で生まれた文化であるとともに世界の文化の一部として認められているとすれば、日本で生まれた「忍者（NINJA）」の何が世界の人を魅了するのでしょうか。忍者を文化としてどう理解すればよいのでしょうか。

忍者を文化としてとらえる、学術上の成果を踏まえる、そして、日中の交流のなかで考える、以上の視点から、私たちは問題を考えはじめています。中国からの影響、日本から影響、そして相互の影響のなかで現代の忍者像がつくられはじめています。日中の相互の理解がますます必要となっています。

私たちは、日中の忍者文化研究を発展させ、さらにはアジア、そして欧米の人たちとの研究を進めるなかで忍者文化の研究を確立したものとしていきたいと考えています。

私たちは、忍者文化研究それ自体とともに、それを通して伊賀という土地に新しい息吹を吹き込めないかと模索しています。「モノ」は国境を越えて移動します。しかし、「マチ」は移動できません。だから、移動できない「マチ」に新しい息吹を吹き込み、世界に発信できる「ヒト」をつくり、そして「ヒト」に来てもらいたい。上野商工会議所と三重大学人文学部は連携して、そのような挑戦に取り組みたい。伊賀市や伊賀上野観光協会等、地元のみなさまのご指導とご協力をお願いいたします。

「忍者」を通してみた中日文化交流

中国社会科学院日本研究所教授　　崔世廣

忍術の起源には多くの説があるが、忍者の兵法の源流は、中国の最も著名な兵法書『孫子』や忍法書の古典とされる『遁甲方術書』などに求められよう。『日本書紀』によれば、602(推古10)年に百済僧・観勒によって暦の本および天文地理書、併せて遁甲方術の書がもたらされると記している。また、聖徳太子は、「志能便（しのび)」「志能備」と呼ばれるスパイを使ったといわれ、天武天皇は、「天文、遁甲に能し」といわれている。『孫子・用間篇』『遁甲方術書』等の兵法がもとに、平安時代の天台・真言密教の秘法や山岳信仰の修験道の修行などと結びつき、間(かん)を用いる術としての忍術が生まれたのであろう。

忍者の活躍時期は、鎌倉時代から戦国時代までとされている。真の忍者になりたければ、苦しい修行に耐え、修練を積まなければいけない。また、忍者も代々伝えられているおきてを遵守しなければならない。それが「忍術」という「忍者文化」だ。「忍者文化」は、日本の社会、文化の風土に根ざしたものであり、日本文化の重要な一部であるが、呪術や奇術を得意とした特徴がある。しかし、「臨、兵、闘、者、皆、陣、裂、在、前(（リン、ピョウ、トウ、シャ、カイ、ジン、レツ、ザイ、ゼン）)」の九字の呪文は、中国の東晋の葛洪が著した『抱朴子』内篇巻 17「登渉篇」に由来したことから、中国の道家文化などの影響も見られる。

泰平時代といわれる江戸時代に入ると、忍者が活躍する舞台がなくなり、伝承や文芸のなかの存在となった。この時期に中国から『三国志演義』、『水滸伝』、『龍図公案』、『剪燈新話』など沢山の小説が輸入され、人々に愛好されていて、新たな忍者像の形成に大きく寄与した。例えば、浅井了意著『伽婢子』に『五朝小説』などの影響がみられ、原話に出てくる任侠のかわりに、超人的な忍術を使う忍者が登場された。元禄時代以後になると、実際の忍者と違った忍者像が形成され、出版文化の高まりとともに独り歩きしてきた。読本には忍者が好まれ「児来也説話」の児来也、「列戦功記」の飛加藤、「絵本太閤記」の石川五右衛門などが有名であった。

古代の中日文化交流の主役は、貴族知識人から禅宗僧侶へ、禅宗僧侶から武士庶民へと幾つかの段階を辿ってきた。江戸時代に形成された忍者像は、庶民文化交流の中で形成されたものだけに、現代でも世界の人々を魅了する大きな原因ではないだろうか。

プロフィール

■崔　世廣　さい・せこう

生年月　1956.06

所属　中国社会科学院日本研究所教授

専門分野　日本文化、日本思想史

主な業績

近代啓蒙思想と近代化	北京航空航天大学出版社、1989 年
日本近代化過程における文化変容（編著）	河北人民出版社　2009 年
メディア文化と相互イメージ形成（共著）	九州大学出版社　2010 年
神道と日本文化（編著）	中国社会科学出版社、2012 年

『孫子』と『万川集海』とを比較して

三重大学人文学部　片倉望

延宝四年（1676年）に伊賀国の郷士、藤林長門守の子孫である藤林保武によって編纂された『万川集海』は、伊賀・甲賀に伝わる忍術の秘伝を集大成した書物であるが、序文からも明らかなように、その理論的根拠は中国古代の兵法書、『孫子』に置かれている。すなわち、そこで説かれている、戦争における間諜や忍者を最小の労力で最大の成果を上げる手段とみなすという考え方や、間諜や忍者が入手した情報で敵の謀を伐つという立場は、すべて、戦わずして勝つという『孫子』が主張する最善の策を前提としたものである。また、『万川集海』に説かれる「陽忍」の殆どは『孫子』用間篇に説かれる五間（「郷間」「内間」「反間」「死間」「生間」）に該当するものでり、最小の労力で最大の成果を上げる存在であるからこそ、戦時に備えて忍者を優遇しなければならないとして、平時における忍者の意義を称揚しようとする『万川集海』全編を貫く著作意図もまた、『孫子』の主張に裏付けられたものであった。

しかしながら、『万川集海』に説かれる忍者の種類は『孫子』の五間以外のものを多く含み、とりわけ「陰忍」はその殆どが高度な職業訓練を受けた人々であって、そのような、いわば特殊部隊の編成は、『孫子』には全く説かれていない種類のものである。また、明の時代の劉寅が著した『孫子』の注釈書である『直解』を引用し、紀元前の書物である『孫子』をより時代にマッチした形で取り込もうとする姿勢も、『万川集海』には顕著である。さらにまた、『万川集海』中に引用される『孫子』の原文と、文脈から推定されるその箇所での『孫子』意味とを詳細に検討するなら、通常の解釈とは異なる、『万川集海』独自の『孫子』理解が明確となり、『孫子』に依拠しつつも、実際には『孫子』とは異なる新たな戦争観、倫理観が展開されていることが確認されるのである。

すなわち、『孫子』の場合、「詭道」である軍隊を動かす将軍が、戦場という現場では、時には君主の意向を無視することも可能な全権を握っていて、彼の道徳性と、国民を保全し君主の利益を図るという目的とが、その計略を使って敵を陥れるといった陰湿な戦いの手段を浄化する役割を果たしていた。一方、『万川集海』においては、使われる側の忍者の道徳性が「正心」という形で求められていて、平時と戦時との道徳性の区分け、及び、君主に対する忠節心の厚さが、特殊な道具と技術とを駆使して鍵をこじ開け、秘かに他家や敵の城に忍び込むという、盗賊とも類似した忍者の活動を浄化する目的を担わされていたのである。

このような、使う側の責任者だけではなく、使われる側の人間の一人一人にも倫理性を求めるという姿勢が、忍者集団の組織化と相俟って形成されたものであることは見やすいところであろう。そして、『万川集海』の持つ思想的オリジナリティもその倫理主体の変化にこそ求めるべきではないだろうか。

プロフィール

■片倉　望　かたくら・のぞみ

生年月　1952.08

所属　三重大学人文学部教授

専門分野　中国古代思想史

主な業績等

『自然の探究』三重大学出版会、2009年。

「荀子欲望論和等級制研究」（『孔孟荀之比較』社会科学文献出版社、1994年。）

『荀子・韓非子』角川書店、1988年。

「中国の間諜と日本の忍者」

H25,8.8

甲賀忍之伝宗師家　川上仁一

「間諜」とは相手の情況を偵察し、我が方を有利に導く秘密活動(諜報、謀略、撹乱等)を総称し、古今東西で普遍的に行なわれてきており、現代では英語の「SPY」や「工作員」「秘密情報員」等と呼称されているものである。

中国でも古代より盛んに用いられ、春秋左氏伝(戦国時代？)によれば、夏の王の少康が間諜を用い、澆の動静を探らせて過、戈の両国を滅ぼしたのに始まるとし、「間諜」の様々な事跡は多くの歴史書や兵法諸書等にも記録されている。

「間諜」の語は史記(BC91年頃)の李牧伝に「謹烽火　多間諜」と記されるのが中国での古い用語例とされるが、間諜と同義語として「俔」や「間」「諜」「偵候」「游偵」「細作」「中詗」等々の名称でも古典に記されている。日本では日本書記の推古天皇九年記(601)に「新羅之間諜者迦摩多至対馬」とあるのが最初とされる。「間諜」は「うかみ」と訓ぜられており、日本でも古くより同様の役割を負った者があったと推測され、古事記や日本書記に載る神々の逸話にその片鱗が見れる。

種々の文物とともに古代日本にもたらされた,武経七書等の中国の古代兵法書には、「孫子」の「用間篇」に代表されるように、間諜の重要性や用法理論の解説がなされている。日本の「間諜」にも参考とされたかもしれないが、兵書で説かれる「用間」(間諜の用法)は、軍を統率する将としての心得と理論が中心であり、その具体的実践手法は後代に至るまで詳細に述べられた物は無い。

また兵書や史書等の古典によれば、中国の「間諜」は特殊な技術を駆使する専門者としてより、普通人を活用し「間諜」の役割の一部を担わせた者で有る場合が殆どである。日本の「忍者」は、古代の「窺見」「間諜」等の時代より、外来の文化・知識をも取り入れながら、長い戦乱の中で術技が工夫され、江戸期に実践技術として集大成された専門の職名でもある。

武家名目抄(江戸後期)では「忍者」の項を掲げ「間諜」「間者」「諜者」ナドトモ呼ブ、と説き「間諜」と「忍者」を異名同義としている。しかし実際には「間諜」の表現が「忍者」になっていることにも大きな差異がある。間は「あいだ」「すきま」「ひそかに」、諜は「さぐる」「うかがう」「まわしもの」等の語義であり、忍は「たえしのぶ」「かくす」「むごいことをする」等の他に、心の上に刃の字体よりくる精神的意義を重要視したものとも解される。

中世の日本では「忍び」と呼ばれる場合が多く、古くは軍記の「太平記」(1370頃迄)に載る言葉だが、奇襲を中心とした撹乱活動が目立っている。忍術書の「正忍記」(1681)には忍兵の品(忍びの種類)として、唐間、郷導、外聞、忍者、盗人を載せるが、この内の唐間が孫子の用間篇に解説される五間に相当する。ここでは盗賊もまた「忍び」とされているのである。

兵書に説かれるように、中国の「間諜」が、国を経営する為政者のための軍用目的により工夫されたとしたら、日本の「忍者」の発生とは些か起源が異なるように伺うことができる。

殊に伊賀・甲賀の「忍び」としての活動からは、古くは平安時代の悪党や盗賊、戦国期の惣国一揆、惣の中で、地域共同体としての村や一族の自立、自存の技術として培われたように類推できる。宗教や卜占、呪術、武術、兵法等々を取り込み、総合生存技術としての「忍びの術(技術)」を工夫し、場合により「間諜」として活動したとも云えるだろう。

戦国期にはその技術により諸大名に仕え、天下統一後の江戸期に入って、中国の古典を引用しながら、かっての「忍び」の技を「忍術」として大成し、その術を駆使し任に当たる者を「忍者」と表現するようになるのである。

「忍者」は確かにその役割から見れば「間諜」そのものに見えるが、その呼称とともに異なった意味合いもあり、日本に発生した独自の文化としての「忍者」の存在があるのである。

プロフィール

1949年8月生　三重大学社会連携研究センター特任教授

伊賀流忍者博物館名誉館長

忍法文学と中国

北京語言大学外国語学院日本語科　関　立丹

忍者は中国でもよく知られている。特に中国の若者は漫画やアニメの『NARUTO』などを通して忍者ものに親しんでいる。日本文学の歴史の中で忍法は三回ブームになったが、第三回忍法ブームの影響は中国にも及んだ。

第三回忍法ブームの決定的な引き金は 1960 年の司馬遼太郎（1923～1996）『梟の城』の直木賞受賞であることはよく知られている。司馬の忍法小説には、他に『風神の門』と『果心居士の幻術』がある。しかし、忍法文学の中国語訳として、『忍者影法師』というタイトルで台湾で出版された『風神の門』だけである。

山田風太郎（1922～2001）は、1956 年に起こった第三回忍法ブームの際に、最も人気のある作家として多くの奇想天外な作品を出した。代表作の『魔界転生』は、大陸にも台湾にも多くの中国語訳本がある。また、デビュー作は台湾では『甲賀忍法帖』1～5（2004）が、大陸では『甲賀忍法帖』（2006）が出された。ほかに、台湾の『柳生忍法帖』（1998）、大陸の『柳生忍法帖』（2006）、台湾の『忍法八犬伝』（1992）がある。

『魔界転生』は大陸でも台湾でも二回ほど訳されたが、台湾では八十年代にはすでに訳されたので、大陸より早い。また、山田風太郎の作品は全体的に台湾のほうが大陸より早く訳されたことと、同氏の忍法小説は大陸のほうでは 2006 年ごろ集中的に訳されたことなどが分かる。

忍者ブームの先駆けとして、五味康祐（1921～1980）や柴田錬三郎（1917～1978）がいるが、五味康祐の『柳生武芸帳』は台湾（1993）のみで訳され、多くは紹介されていないようだ。

中国では、忍法文学についての研究成果はまだ数少ない。最近では、日本大衆文学の研究が中国で重視されるようになり、2009 年正月に日本学研究の代表雑誌『日語学習と研究』によって大衆文学研究の特集が組まれた。中には忍法文学関係の論文があった。

忍者ものとして、中国で 2010 年に和田竜（1969～）の『のぼうの城』、『忍びの国』の中国語版が出された。日本の作品が中国で紹介されるまでの時間的間隔がずいぶん縮められたことが分かる。

プロフィール

■関　立丹　かん・りったん

生年月　1967.08

所属　北京語言大学外国語学院日本語科教授

専門分野　日本近代文学

主な業績等

武士道と日本近現代文学　中国社会科学出版社、2009年

日本古典文学史（共著）　北京語言大学出版社、2012年

日本国民文学における「道」　『社会科学戦線』　2009年5月号

中国語圏の娯楽・メディアの中の忍者（レンジャー）

北京外国語大学 北京日本学研究センター　秦 剛

忍者をめぐるイメージや表象が海を越えて、中国語圏の娯楽・メディアに浸透したのは1970 年代後半からであり、香港のカンフー映画がその嚆矢となった。忍者がいち早く香港映画で登場したのは、香港と日本映画界との人材、技術、市場など多方面にわたる交流の賜りものでもある。

香港映画における忍術の表現には、制作側の勝手な解釈と想像も多分に盛り込まれているが、忍者を登場させた初期の作品では、忍者の術を柔道、空手、合気道など日本の古武道と同質のものとして捉え、しかも、それらよりも、ずば抜けて奇異的で、手強い日本の術として表現されてきた。特に中国武術の凄さを誇示するカンフー映画では、忍者は日本からの強敵そのものであり、恐怖と敵愾心を煽る最大級の要素のひとつに仕立てられている。

そして、哈日（ハーリー）族と呼ばれる、日本の流行文化に熱狂する若者の世代が台湾、香港、中国大陸に現れた 21 世紀には、忍者が持つ日本的なナショナリティが脱色させられた、無国籍の忍者イメージが生産されるようになる。今年にシリーズ第２弾が公開された中国産アニメ『魁拔』は、中国の若者たちの中で絶大の人気を呼んだ日本のアニメ『NARUTO -ナルト-』の影響を強く受けている。また、同じく今年４月封切りの「抗日」題材のコメディー映画『厨子戯子痞子』（料理人、役者、ゴロツキ）にも、忍者に関連する記号がいくつかの場面に登場している。

本発表は、下記の映像作品を紹介しながら、1970 年代から現在にかけて、中国語圏の娯楽・メディアが、忍者という外来のものを自家薬籠中のものとしてきた過程を振り返ってみる。

１、映画『中華丈夫』（1978、日本語題名『少林寺 VS 忍者』、劉家良（ラウ・カーリョン）監督）

２、映画『五遁忍術』（1982、日本語題名「少林拳対五遁忍術」張徹（チャン・チェ）監督）

３、映画『生死决』（1982、日本語題名『ザ・SFX 時代劇・妖刀斬首剣』、程小東（チン・シウトン）監督

４、映画『龍之忍者』（1982、日本語題名『龍の忍者』、元奎（コリー・ユエン）監督）

５、映画『忍者潜龍』（1984、日本語題名『忍者＆ドラゴン』、丁卓侖監督）

６、周傑倫（ジェイ・チョウ）『忍者』（2001 年、方文山作詞、周傑倫作曲）MV

７、映画『終極忍者』（2004、日本語題名『忍者』、邱礼涛監督）

８、劇場アニメ『魁拔』Ⅰ、Ⅱ（2011、2013、日本語題名『魁拔』、王川監督）

９、映画『厨子戯子痞子』（「料理人、役者、ゴロツキ」、2013、管虎（クワン・フー）監督）

プロフィール

■ 秦 剛　しん・ごう

生年月　1968.08

所属　北京外国語大学 北京日本学研究センター　副教授

専門分野　日本近現代文学

主な業績等

「原発建設時代の日本のＳＦアニメ」（『大衆文化』、2012年4月）

「芥川龍之介　大陸で磨かれた小説家のジャーナリズム　その中国観察と日本への再認識」（『渡航する作家たち』、翰林書房、2012年4月）

「『戯曲蟹工船』と中国東北部の「留用日本人」――中日戦後史を結ぶ「蟹工船」」（『多喜二の文学、世界へ』、小樽商科大学出版社、2013年3月）

現代中国における「忍者」文化の伝播と受容

中国社会科学院日本研究所　唐永亮

改革開放後、中国と世界諸国間の文化交流の深化に随い、アメリカや日本が生産された「忍者」に関する文化製品も中国市場に入ってきた。中国人の忍者像はだんだん樹立されるようになった。中国における「忍者」文化の伝播というと、大雑把に三つの段階がわけられる。

１９８０年代、「忍者」文化の第一ブーム。この時期の代表作は『Teenage Mutant Ninja Turtles』などで、おもに北京テレビ局、広東テレビ局などで放映された。アメリカ製「忍者」像の形成期。

１９９０年代、「忍者」文化の第二ブーム。この時期の代表作は『伊賀野カバ丸』、『忍たま乱太郎』(TV版と劇場版) などで、陝西テレビ局、STAR Group テレビ局などで放映された。また、『忍者龍剣伝』や『ミュータントタートルズ』などのゲームもすごく流行した。日本製「忍者」像の確立期。

２０００年代以後、「忍者」文化の第三ブーム。この時期の代表作は『NARUTO』などをあげられる。おもにSTAR Group テレビ局や土豆網というサイトで放映された。また２０１２年にCCTV６で『NARUTO』(劇場版) が放映できるようになった。『フルーツ忍者ゲーム』などのゲームも登場し始まった。メディア通路の多元化で「忍者」ファンの壮大期。

『NARUTO』という人気アニメを例として、「忍者」文化が中国で歓迎される原因を分析してみようと考える。中日文化相似性がある上での「忍者文化」の神秘性、漫画やアニメを中心とする日本文化産業の発達、中国における情報技術の発達などの客観要素があるほかに、「忍者」漫画やアニマで表する向上意識、友情の高く謳え、理想主義など心理面の共鳴も無視できない要素もあることが分かる。

プロフィール

■唐　永亮　とう・えいりょう

生年月　1977.5

所属　中国社会科学院日本研究所　副教授

専門分野　日本文化

主な業績等

中江兆民の国際政治思想　社会文献出版社　2010年

グローバル化における東亜文化の価値（共著）　天津人民出版社、2013年

日本における神道の時空観　『日本学刊』2011年3号

日本文化産業およびその理論を論じる　『東北亜学刊』2011年4号

近代日本における忍者像の形成

三重大学人文学部　吉丸　雄哉

忍者の国際的イメージを検討するために、まず日本人にとっての忍者像の形成について考えてみたい。

江戸時代まで、忍術書はごく一部の人しか読むことができなかった。また、忍びの活躍を伝える史書もその信頼性は玉石混淆の状態であった。一般人がイメージする忍者像は戯作文学や歌舞伎によるところが多く、忍術使いと妖術使いが混雑された児雷也のような忍者像が普及していた。

大正２年に、立川文庫に猿飛佐助が登場すると、従来の盗賊めいた後ろ暗いイメージのある忍者像は変化する。『西遊記』の孫悟空が猿飛佐助のキャラクターに影響していると言われており、明るい正義の忍者が活躍するようになった。同時期に尾上松之助らの忍者映画が制作され、忍者ブームが起こった。忍者研究もこの時期に発生した。大正・昭和前期と忍者研究をリードしたのはジャーナリストの伊藤銀月である。伊藤銀月（1871－1944）は『忍術の極意』（武侠世界社、大正６）以降数多くの忍者研究書を記した。非科学的な忍術の否定と、『正忍記』にもとづく合理的な忍術の紹介、そして忍術が現代社会の処世術として有効であるというのが基本態度である。

伊藤銀月は『現代人の忍術』（巧人社、昭和 12）で「戦争にも忍術時代が来た」と記す。この方面を引き継いで忍術研究を発展させたのが『忍術秘録』（千代田書院、昭和 11）を執筆した藤田西湖（1899－1965）である。研究面では『万川集海』を利用した点に特徴がある。藤田西湖は甲賀流第十四世を名乗り忍者として活動していた。自伝『どろんろん　―最後の忍者』（日本週報社、昭和 33）によれば、陸軍中野学校で教鞭をとり、中国大陸で諜報活動にあたった。忍術からスパイ戦へ』（東水社、昭和 17）という著作もあった。

戦後、織田作之助（昭和 20）・富田常雄（昭和 22）・林芙美子（昭和 25）らが猿飛佐助をテーマに小説を書いた。杉浦茂の漫画『猿飛佐助』は昭和 29 年から、五味康祐『柳生武芸帳』は昭和 31 年から連載がはじまる。昭和 33 年の司馬遼太郎『梟の城』、山田風太郎『甲賀忍法帖』以降、昭和 30 年代は忍者ブームが巻き起こり、白土三平（忍者武芸帳など）や横山光輝（伊賀の影丸、村上知義『忍びの者』シリーズ（昭和 35 より）、山本薩夫監督・市川雷蔵主演『忍びの者』シリーズ（昭和 37 より）など、著名な作品が登場した。ニヒリスティックな作品が多いことがこの時代の特徴である。

研究では、『忍術秘伝』（凡凡社、昭和 34）を世に出し、以後忍者関係の書物を書き続けた奥瀬平七郎が中心となる。奥瀬は忍びの研究書と忍びになるための実用書の両方を残した。研究では、『孫子』の影響から忍者の源流を中国に求めたことや、忍者の歴史を上代まで遡らせたことに特徴がある。実用面では、忍術の実社会に役に立つ面を強調した。伊賀市長も務めた奥瀬は忍者・忍術の明るい面を見たといえようか。

アメリカでは 1980 年代以降、小説”The Ninja”やショー・コスギの忍者映画、ミュータントタートルズなどが登場し、アメリカから他の国へ伝播する形で忍者が広まる。しかし日本にはほとんど逆輸入されず、それらの地域との忍者像のギャップが生じている。

研究に関しては、それ以降も基本は奥瀬路線であるように感じる。近年、藤田和敏・磯田道史・笠井賢治・山田雄司ら、史学の手法で忍び・忍術を研究していることが注目に値する。

文芸には、江戸時代以来の非現実的で華々しい忍法を使う忍者と、忍びの実態にあわせたリアリスティックな描かれた方をする忍者の両方が存在する。文芸・漫画・映画にみえる忍者の姿、また忍者を愛好する文化そのものの研究が今後必要であろう。

プロフィール

■吉丸　雄哉　よしまる・かつや

生年月　1973.08

所属　三重大学人文学部准教授

専門分野　日本近世文学

主な業績等

『武器で読む八犬伝』新典社、2008年。

『式亭三馬とその周辺』新典社、2011年。

「近世における「忍者」の成立と系譜」（『京都語文』19、2012年11月）。